

福島の間を見る、そして福島のこれからを考える

Looking at Fukushima now and thinking about the future of Fukushima

山口 拓允

Takumi YAMAGUCHI

環境省大臣官房環境保健部放射線健康管理担当参事官室

Office of Director for Radiation Health Management,
Environmental Health Department, Ministry of the Environment

東京電力(株)福島第一原子力発電所事故(以下、原発事故)から8年半が経過し、避難指示区域の再編が進んでいる。今年度中にはJR常磐線の全線開通が予定¹⁾され、少しずつ目に見える形で原子力災害からの復興が進んでいる。しかし、現在の被災地は復興の過程で、津波の被害に伴う家屋の倒壊や解体、事故後に建設の進んだ太陽光パネルや、除染除去土壌の入ったフレキシブルコンテナバッグの置かれた仮置き場等があり、多くの住民からは、「事故前のふるさとの景色とは大きく異なってしまった」と吐露する声を聞く。

環境省は、これまで放射線健康管理・健康不安対策に取り組み、対話や共考、協働を通して、特に福島県内の住民とともに歩みを進められてきたと考えている。そうした取組みの中で気づかされたことは、時間の経過とともに住民ひとりひとりの復興の状況は異なり、個性を意識した対話が重要になってきているということである。

環境省は、今回、放射線健康不安対策の一環として、第8回日本放射線看護学会学術集会(以下、第8回学術集会)前日に、「福島復興視察ツアー」と題し、第8回学術集会の参加者に現在の福島の状況を見ていただく会を企画した。今回のツアーでは、福島市を出発し、国道6号線を通り、車窓から現在の被災地の状況を見ていただくとともに、富岡町・大熊町にて降車し、東京電力廃炉資料館、福島県ふたば医療センター附属病院の見学とともに、町の現況を間近で確認してもらうという行程でおこなった。

富岡町は2017年に避難指示が一部解除された自治体であり、JR常磐線富岡駅、夜ノ森駅を有する自治体である。避難指示解除から2年が経過したものの現在の人口は事故前の7%以下にとどまっている²⁾。富岡駅周辺は、津波の被害も大きく、事故前、事故直後と現在では、大きく様変わりしている。事故直後の様子を知っている参加者からは、「前見たときと全く違う」との声も聞かれ、その状況の変化が見て取れたように感じる。さらに、夜ノ森駅周辺では現在も除染作業が実施されている様子があり、「まだまだここら辺は時間が止まっているような感じ」との感想も出ていた。また、大熊町は東京電力(株)福島第一原子力発電所の立地町であり、2019年に大川原地区、中屋敷地区の一部避難指示が解除され、役場本庁舎を避難指示が解除された地区に移した自治体である。現在、役場前に医療施設、商業施設の建設を行っているとともに、復興公営住宅の建設を行っているところである。現在避難指示が解除された地区が限定的であることもあり、居住人口は少ないが、

現在実施されている町の再建の状況を参加者には見ていただくことができたのではないかと推察する。

これから、帰還困難区域の再編がさらに進み、避難指示解除区域が増えてくる。さらには、中間貯蔵施設への輸送の動きも活発化してくる。そのなかで、今しか見ることができない被災地の現状を目に焼き付けていただき、参加された方々に、原発事故のことを風化させず、現状を多くの方に伝えていただけることを切に願う。

今後、廃炉や最終処分の問題等、原発事故に係るさまざまな取組みは、数十年以上かかると言われている。そうしたハード面の取組みに加え、ふるさとに戻ったり、新しく福島に移住したりしたが、放射線の健康影響への懸念が根底にあるものなかなか口に出せない住民の方々や、いまだふるさとに帰れず、ふるさとではない場所で生活している住民の方々の心に寄り添った、きめ細やかなリスクコミュニケーションといったソフト面の関わりを今後も継続していく必要があると感じている。

引用文献

- 1) 国土交通省. JR 常磐線の全線開通の見通しに関して (検索日 2019.9.30). http://www.mlit.go.jp/report/press/tetsudo05_hh_000074.html
- 2) 富岡町. 県内外の避難・居住先別人口 (検索日 2019.9.30). https://www.tomioka-town.jp/soshiki/jumin/jumin/hinansya_ninzu/2594.html